



14歳の国連訪問

「奥・井ノ上記念

日本青少年国連訪問団」

外務省総合外交政策局国連企画調整課主管、財団法人日本国際連合協会が主催する、中・高校生8名の国連機関等訪問団の実施運営をIFAが担当した。この事業は、平成13年度に当時の外務省国連政策課長であった故・奥克彦大使の発案により始められたもので、イラクの平和と復興を願いつつ殉職された奥大使と井ノ上一等書記官の功績を称えとともに、日本の青少年に世界の平和と繁栄に貢献することの大切さを伝えるために、日本の国連加盟50周年にあたる平成18年度より兩名の名前を冠して実施している。

今回、唯一の男子生徒参加者よりIFAに寄せられた本団への参加のきっかけと感想を抜粋掲載する。なお、訪問団の報告小冊子は別途、主催機関より発行される。



原田拓弥

北海道函館ラ・サール中学校3年

昨年の夏休み明け、英語科の先生が、「第16回国際理解・国際協力のための(北海道小中学生)作文コンテスト」を紹介して下さった。この作文コンテストは、日本国際連合協会北海道本部と北海道が主催している。僕は、かねてから国連に興味があったので、この作文コンテストに応募することにした。この作文コンテストは、三つのテーマの中から一つを選んで、原稿用紙4枚(1600字)以内に自分の考えをまとめるというものだ。

僕は「国連改革～もしも私が国連職員なら」を選んだ。インターネットで過去の受賞作を調べてみると、他の二つのテーマが多く、海外での体験・経験について書かれている作品が多かった。僕にはそういう経験がないし、いわゆる一般論になりかねないと思った。「国連地球環境理事会の創設」というアイデアをもっていたこともこのテーマを選んだ理由だ。

9月の上旬から中旬にかけて、先生のご指導のもと作文をまとめ、9月20日の締め切りにぎりぎり間に合った。

10月10日、朗報が届いた。僕の作文が「北海道知事賞」に入ったのだ。うれしかったが、これはあくまで予選通過である。日本国際連合協会北海道本部長賞と北海道知事賞を受けた作品が、財団法人日本国際連合協会主催の「第47回国際理解・国際協力のための全国中学生作文コンテスト」に提出さ

れる。

10月24日、「国連デー」での講演会と表彰式に担任の先生ご引率のもとに出席した。その式の直前に、僕の作文が全国の本選で「外務大臣賞」に入ると聞いた。とてもうれしかった。特賞(外務大臣賞・文部科学大臣賞・日本国際連合協会会長賞・日本ユネスコ協会連盟会長賞)には、春休みに米国ニューヨーク国連本部への視察旅行という副賞がついている。

このようなわけで、「平成19年度奥・井ノ上記念日本青少年国連訪問団」に参加することになった。中学生4名、高校生4名(「第54回国際理解・国際協力のための高校生の主張コンクール」での特賞受賞者)からなる団だ。

わずか14歳で国連、そしてニューヨークに行くことができるのは夢にも思わなかった。僕にとっては飛行機に乗るのも初めての経験だった。

国連やその関連施設の訪問もとても興味深かったが、現地の日本語を学ぶ高校生との交流はとても楽しかった。英語という国際語を母国語とするのに、あまり使えない日本語を学ぼうとする姿勢はすごいなあと思った。「あまり使えない」と書いたが、僕はむしろ日本語が母国語あることをうれしく思う。日本語って奥が深いと思うのだ。

今回の訪問で、一番大切なのは、どこに行こうとも、「人」だと本当に素直に思った。いろいろな人に出会い、別れた。いつか再会できることを信じている。

世界万華鏡

日本語教育 ながほすみお 永保澄雄 シリーズ⑭

“歩く”

子どもの時から歩くことが好きだった。中学1年の夏、東京・裏高尾の影信山(かげのぶやま)に登ったのがきっかけで、山歩きが病みつきになってしまった。いわゆる“クライミング”ではなく、ただ山路を歩いたり峠を越したりするだけである。「山気日夕佳し」という言葉があるが、その山気に包まれて歩いていると世俗の中であくせくとしている自分がもの遠く思われた。冬枯れには山の木々の梢がセピア色に、まるで煙っているように見えた。そういう中を歩いていると心が安らいだ。

勤めるようになってからもよく一人で山に入った。時間がとれずに近くの、それも低い山々の尾根を歩くことが多かった。仕事を終えて、当時は国電と言った中央線の新宿から浅川行き終電車に乗り、終点で降りた。今の高尾駅であるが、駅のすぐ前を甲州街道が通っており、少し西に行くと小名路に出る。右に曲がるとそこは旧甲州街道で道幅はぐっと狭くなる。谷の道であるが、山が低いので小仏にかかる前は明かりなしでも歩くことができた。朝になるまでの時間かせぎということもあってなるべくゆっくり歩いた。峠を

登り切ったところで一息入れ、そこから下って相模湖に出た。その頃には夜はしらじらと明けてくる。露の降りるのを感じることもあった。はじめは面白がってついて来た友だちも一度でこり、いつも一人で歩くことになった。上野原で早い車を待ち新宿に戻った。今で言う“トレッキング”であるが、ただ山道を歩くだけなのでまわりからは変人に思われた。

トレッキングの本場であるニュージーランドに仕事で住むようになったのは五十を過ぎてからである。4年間いたが、その間国内のいろいろな都市に出張した。どこも歩いてみたい所ばかりで、つくづく自然に恵まれている国だと思った。住んでいた首都のウエリントンも人口のあまり多くない、こじんまりとした街で、湾に山が迫っている地形だ。住宅は山の方に開けていて、それは神戸を思わせた。南半球一の美港都市と言われるだけあって、市内も郊外も散歩やトレッキングの場所に事欠かなかった。湾が眼下に見える尾根づたいの道を夕日が沈むまで歩いたこともあった。ただ私のこの「歩き」はただの散歩で、トレッキングなどと言

えるものではなかった。

トレッキングがどういふものであるかはこの国に来てから知ったのであるが、ニュージーランドの人たちはこのトレッキング、つまり彼らの言う“トラッピング”が大好きで国内の至る所にその良いコースを持っていた。その中でも私が行きたいと思ったのは南島南部のミルフォードサウンドである。一度バスで行ったことがあったが、そのバスが通る深い森が気になった。あの中を歩いてみたいものだと思った。普通の森とは異った、何か神秘的なものをそこに感じたのである。

このトラッピングツアーはすぐ見つけた。ハットと呼ぶ森の中の小屋に泊まりを重ねて何日も森の中を歩くのである。まずそんな休みはとれないと思いつい結局このトラッピングは断念した。

私はいま八十近くになっているが、市谷の桜の堤を毎日てくてく歩いている。

平成20年4月17日発行
社団法人 国際フレンドシップ協会
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-12
麻布台ロイヤルプラザ502
発行責任者: 及川 伊佐子
編集: 事業部 03(3582)3021
印刷: 音和堂印刷